二 次の文章は、芥川龍之介の小説『秋』の一節である。東京の女子大学で才媛と言われ、作家になることを目指していた信子は、従兄の大学生俊吉と親しく交際し、やがて二人は結婚するだろうと周囲からは思われていた。ところが信子は、卒業後すぐに別の男と結婚し、夫に従って大阪で暮らすことになった。大阪での新婚生活も落ち着いた頃、信子が小説を書きたいと口に出したところ、夫から嫌味を言われて泣かされたこともあった。その後、夫婦の間ではささいなことでうまくいかないことが増えていった。一方、信子の妹の照子は、姉の結婚後に俊吉と結婚し東京で暮らしていた。以下の文章は、照子と俊吉が結婚した翌年に、信子が妹の家を訪れた場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（本文には、一部表記を改めた箇所等がある。）（40点）

信子はその翌年の秋、社命を帯びた夫と一緒に、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い日限内に、果すべき用向きの多かった夫は、ただ彼女の母親の所へ、来早々顔を出した時のほかは、ほとんど一日も彼女をつれて、外出する機会を見出さなかった。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終点から、たった一人俥に揺られて行った。

彼らの家は、町並が葱畑に移る近くにあった。しかし隣近所には、いずれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べていた。(注1)のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、――すべてがどの家も変りはなかった。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、声に応じて出て来たのは、意外にも従兄の方であった。俊吉は以前と同じように、この珍客の顔を見ると、「やあ。」と快活な声を上げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなったのを見た。「暫く。」「さあ、御上り。生憎僕一人だが。」「照子は？　留守？」「使に行った。女中も。」――信子は妙に恥しさを感じながら、派手な裏のついた上衣をそっと玄関の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書斎兼客間の八畳へ坐らせた。座敷の中には何処を見ても、本ばかり乱雑に積んであった。殊に午後の日の当った障子際の、小さな紫檀の机のまわりには、新聞雑誌や原稿用紙が、手のつけようもないほど散らかっていた。その中に若い細君の存在を語っているものは、唯床の間の壁に立てかけた、新しい一面の琴だけであった。信子はこういう周囲から、暫く物珍しい眼を離さなかった。

「来ることは手紙で知っていたけれど、今日来ようとは思わなかった。」――俊吉は巻煙草へ火をつけると、さすがに懐しそうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何？　幸福？」――信子もまた二言三言話す内に、やはり昔のような懐しさが、

よみ返って来るのを意識した。文通さえ碌にしなかった、かれこれ二年越しの気まずい記憶は、思ったより彼女を煩さなかった。

彼らは一つ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合った。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話題はいくら話しても、尽きない位沢山あった。が、二人ともいい合せたように、全然暮し向きの問題には触れなかった。それが信子には一層従兄と、話しているという感じを強くさせた。

時々はしかし沈黙が、二人の間に来る事もあった。その度に彼女は微笑したまま、眼を火鉢の灰に落した。其処には待つとはいえないほど、かすかに何かを待つ心もちがあった。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破った。彼女は次第に従兄の顔を窺わずにはいられなくなった。が、彼は平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を装っている気色も見えなかった。

その内に照子が帰って来た。彼女は姉の顔を見ると、手をとり合わないばかりに嬉しがった。信子も唇は笑いながら、眼には何時かもう涙があった。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以来の生活を互に尋ねたり尋ねられたりしていた。殊に照子は活き活きと、血の色を頬に透かせながら、今(注2)でも飼っている鶏の事まで、話して聞かせる事を忘れなかった。俊吉は巻煙草を啣えたまま、満足そうに二人を眺めて、あいかわらずにやにや笑っていた。

其処へ女中も帰って来た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書を受取ると、早速側の机へ向って、せっせとペンを動かし始めた。照子は女中も留守だった事が、意外らしい気色を見せた。「じゃ御姉様がいらしった時は、誰も家にいなかったの。」「ええ、俊さんだけ。」――信子はこう答える事が、平気を強いるような心もちがした。すると俊吉が向うを向いたなり、「旦那様に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」といった。照子は姉と眼を見合せて、悪戯そうにくすりと笑った。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかった。

間もなく信子は、妹夫婦と一緒に、晩飯の食卓を囲むことになった。照子の説明する所によると、膳に上った玉子は皆、家の鶏が産んだものであった。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪で持っているんだね。小はこの玉子から――。」なぞと社会主義じみた理窟を並べたりした。そのくせ此処にいる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは俊吉自身に違いなかった。照子はそれが可笑しいといって、子供のような笑い声を立てた。(1)信子はこういう食卓の空気にも、(注3)遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思い出さずにはいられなかった。

話は食後の果物を荒した後も尽きなかった。微酔を帯びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭弁を弄した。その談論風発が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も小説を書き出そうかしら。」といった。すると従兄は返事をする代りに、グウルモン(注4)の警句を抛りつけた。それは「ミュウズ(注5)たちは女だから、彼らを自由に虜にするものは、男だけだ。」という言葉であった。信子と照子とは同盟して、グウルモンの権威を認めなかった。「じゃ女でなけりゃ、音楽家になれなくって？　アポロは男じゃありませんか。」――照子は真面目にこんな事までいった。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になった。

寝る前に俊吉は、縁側の雨戸を一枚開けて、寝間着のまま狭い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく「ちょいと出て御覧。好い月だから。」と声をかけた。信子は独り彼の後から、沓脱ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脱いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあった。

月は庭の隅にある、痩せがれた檜の梢にあった。従兄はその檜の下に立って、うす明るい夜空を眺めていた。「大へん草が生えているのね。」――信子は荒れた庭を気味悪さうに、怯ず怯ず彼のいる方へ歩み寄った。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜かな。」と呟いただけであった。

暫く沈黙が続いた後、俊吉は静かに眼を返して、「鶏小屋へ行って見ようか。」といった。信子は黙って頷いた。鶏小屋は丁度檜とは反対の庭の隅にあった。二人は肩を並べながら、ゆっくり其処まで歩いて行った。しかし蓆囲いの内には、唯鶏の匂のする、朧げな光と影ばかりがあった。俊吉はその小屋を覗いて見て、殆独り言かと思うように、「寝ている。」と彼女に囁いた。「玉子を人に取られた鶏が。」――信子は草の中に佇んだまま、そう考えずにはいられなかった。……

二人が庭から返って来ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めていた。青い横ばい(注7)がたった一つ、笠に這っている電燈を。

翌朝俊吉は一張羅の背広を着て、食後早々、玄関へ行った。何でも亡友の一周忌の墓参をするのだとかいう事であった。「好いかい。待っているんだぜ。午頃までにゃきっと帰って来るから。」――彼は外套をひっかけながら、こう信子に念を押した。が、彼女は華奢な手に彼の中折(注8)を持ったまま、黙って微笑したばかりであった。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく茶をすすめなどした。隣の奥さんの話、訪問記者の話、それから俊

吉と見に行った或外国の歌劇団の話、――その他愉快なるべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかった。が、信子の心は沈んでいた。彼女はふと気がつくと、何時も好い加減な返事ばかりしている彼女自身が其処にあった。それがとうとうしまいには、照子の眼にさえ止るようになった。妹は心配そうに彼女の顔を覗きこんで、「どうして？」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのだか、はっきりした事はわからなかった。

柱時計が十時を打った時、信子は懶そうな眼を挙げて、「俊さんはなかなか帰りそうもないわね。」といった。照子も姉の言葉につれて、ちょいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ――。」とだけしか答えなかった。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りている新妻の心があるような気がした。そう思うといよいよ彼女の気もちは、憂鬱に傾かずにはいられなかった。

「照さんは幸福ね。」――信子は頤を半襟に埋めながら、冗談のようにこういった。が、自然と其処へ忍びこんだ、真面目な羨望の調子だけは、どうする事も出来なかった。照子はしかし無邪気らしく、やはり活き活きと微笑しながら、「覚えていらっしゃい。」と睨む真似をした。それからすぐにまた「御姉様だって幸福のくせに。」と、甘えるようにつけ加えた。その言葉がぴしりと信子を打った。

彼女は心もち眶を上げて、「そう思って？」と問い返した。問い返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顔をして、姉と眼を見合せた。(2)その顔にもまた蔽い難い後悔の心が動いていた。信子は強いて微笑した。――「そう思われるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈黙が来た。彼らは柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鉄瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませていた。

「でも御兄様は御優しくはなくって？」――やがて照子は小さな声で、恐る恐るこう尋ねた。その声の中には明らかに、気の毒そうな響が籠っていた。が、この場合信子の心は、何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へのせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答えなかった。新聞には大阪と同じように、米価問題(注10)が掲げてあった。

その内に静かな茶の間の中には、かすかに人の泣くけはいが聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顔に当てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくったって好いのよ。」――照子は姉にそう慰められても、容易に泣き止もうとはしなかった。信子は残酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震える肩へ無言の視線を注いでいた。それから女中の耳を憚るように、照子の方へ顔をやりながら、「悪るかったら、私があやまるわ。私は照さんさえ幸福なら、何より有難いと思っているの。ほんとうよ。俊さんが照さんを愛していてくれれば――。」と、低い声でいい続けた。いい続ける内に、彼女の声も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり始めた。すると突然照子

は袖を落して、涙に濡れている顔を挙げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかった。が、唯、抑え切れない嫉妬の情が、燃えるように瞳を火照らせていた。「じゃ御姉様は――御姉様は何故昨夜も――。」照子は皆までいわない内に、又顔を袖に埋めて、発作的に烈しく泣き始めた。……

二、三時間の後、信子は電車の終点に急ぐべく、幌俥の上に揺られていた。彼女の眼にはいる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであった。其処には場末らしい家々と色づいた雑木の梢とが、徐にしかも絶え間なく、後へ後へと流れて行った。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂わせた、冷やかな秋の空だけであった。

彼女の心は静かであった。が、その静かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかった。照子の発作が終った後、和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返していた。しかし事実は事実として、今でも信子の心を離れなかった。彼女は従兄の帰りも待たず、この俥上に身を托した時、(3)既に妹とは永久に他人になったような心もちが、意地悪く彼女の胸の中に氷を張らせていたのであった。――

(注)
1 のき打ちの門、要もちの垣――軒から張り出した屋根に柱をつけた門とカナメモチという常緑樹を植えた生垣。
2 今でも飼っている鶏――信子が東京にいたときから、姉妹の家では鶏を飼っていた。
3 遠い松林の中にある、寂しい茶の間――信子が夫と暮らしている大阪郊外の家を指す。
4 グウルモン――R.Gourmont（一八五八－一九一五）。フランスの批評家。象徴主義の理論家。
5 ミュウズ――ギリシア神話の文芸・音楽・舞踏などを司る九人の女神の総称。
6 アポロ――ギリシア神話の男神。音楽・医術・知恵・青春などの神。
7 横ばい――昆虫の名。カメムシ（半翅）目ヨコバイ科。体長3～20ミリでセミに似た形をしている。成虫は夏に灯火に集まり、よく跳躍し、横に這うように動く。
8 中折――中折れ帽子。柔らかな生地で作られた、頂の中央が縦に折れくぼんだ、つばのある帽子。ソフトともいう。
9 眶――目の縁。まぶた。
10 米価問題――昭和十七年までは米は自由販売であり、市場価格が常に変動した。

問一　波線部ⓐ「顔を窺わずにはいられなくなった」、ⓑ「彼一流の詭弁を弄した」、ⓒ「まめまめしく」の本文中における意味として最も適切なものを、次の各群の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ⓐ　顔を窺わずにはいられなくなった
- ア　何とかして自分の気持ちを伝えたくなった
- イ　どうにかして相手の悪意を咎めたくなった
- ウ　どうしても相手の真意を探りたくなった
- エ　これ以上自分の惨めさに耐えられなくなった
- オ　我知らず相手の正気を疑いたくなった

ⓑ　彼一流の詭弁を弄した
- ア　彼自慢の小賢しい弁舌を振るった
- イ　彼が得意とする論法を駆使して批評した
- ウ　彼の洗練された話術で座を支配した
- エ　彼らしい話題の選び方で場を盛り上げた
- オ　彼独特のこじつけの論理を展開した

ⓒ　まめまめしく
- ア　かいがいしく
- イ　よそよそしく
- ウ　うやうやしく
- エ　わざとらしく
- オ　気ぜわしく

問二　傍線部(1)「信子はこういう食卓の空気にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思い出さずにはいられなかった」とあるが、この時の信子の気持ちについて説明したものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　俊吉と照子のお互いを信頼し切った夫婦関係を目の当たりにするうちに、自分が日常生活の忙しさにかまけて夫との関係を蔑ろにしていたことに思い当たり、自分自身の結婚生活に対する認識について反省する気持ちでいる。

イ　俊吉や照子と食卓を囲み、かつてを懐かしみながら和やかな団欒を楽しむにつけて、自分が大阪で送る夫との満たされない生活がいやでも引き比べられ、自身の結婚生活を思い浮かべて頼りなく情けない気持ちを抱いている。

ウ　食卓を囲んで和やかなひとときを俊吉照子夫婦と過ごしたことで、ちょうど今ごろたった一人で心寂しく食事を済ませて夕暮れを迎えているだろう夫のことが思い出され、そこはかとなく申し訳ない気持ちになっている。

エ　俊吉や照子とともに賑やかに食事をしている中で、楽しく座を盛り上げようとする俊吉の姿に好感を抱き、夫とすれ違うことも多い普段の寂しい生活が胸に迫ってきて、俊吉と結婚すればよかったと本気で後悔する気持ちが起こっている。

オ　二年ぶりに会うことができた俊吉や照子と食事をしている時の仲睦まじい二人の様子に当てつけられたように感じ、自分に冷淡な夫とのむなしい生活を思い出しながら、幸せそうな照子に対する激しい嫉妬の気持ちを感じている。

問三　傍線部(2)「その顔にもまた蔽い難い後悔の心が動いていた」とあるが、この時の照子の気持ちについて説明したものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　からかわれたと感じて思わず口にした言葉に対する信子の反応から、自分の言葉が姉に大阪での生活の寂しさを思い出させるものであることに感づいて、せっかく遠くから訪ねてくれた姉の好意を台無しにしてしまったと思って気に病んでいる。

イ　からかわれたと感じて思わず口にした言葉に対する信子の反応から、自分の言葉によって姉に彼女自身の不幸な結婚生活を思い出させたばかりでなく、それを自分にほのめかしたことについて姉が気が咎める結果になったことを申し訳なく思っている。

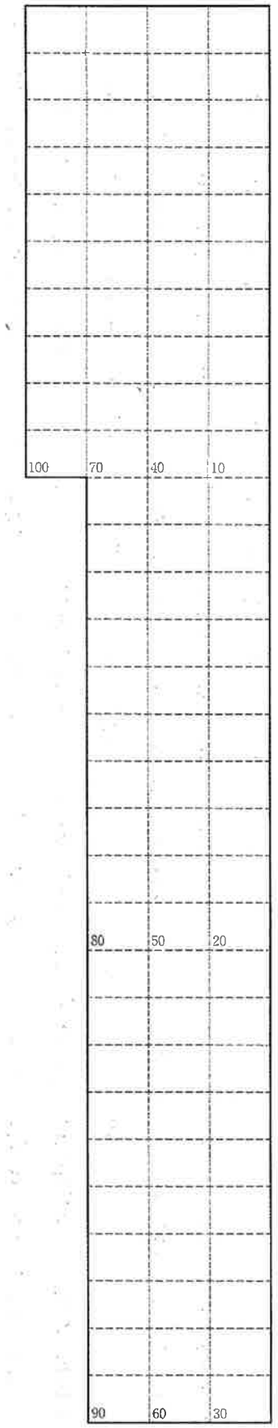
ウ　からかわれたと感じて思わず口にした言葉に対する信子の反応から、自分の言葉が図らずも姉の結婚生活への痛烈な皮肉になってしまったことに思い至り、悪意はなくとも姉に対して不用意に取り返しのつかない言葉を投げかけたことを反省している。

エ　からかわれたと感じて思わず口にした言葉に対する信子の反応から、自分の言葉は俊吉との幸せな結婚生活を姉に当てつけて見せるものであることを悟り、そのような軽薄な態度を示したことを後で俊吉に知られるのではないかと考えて不安になっている。

オ　からかわれたと感じて思わず口にした言葉に対する信子の反応から、自分の言葉は姉が心に隠していた、夫に虐げられているつらい気持ちに触れてしまったことを知り、一見優しげな義兄の本当の姿を知ってしまったことを残念に思っている。

問四　傍線部(3)「既に妹とは永久に他人になったような心もち」とあるが、この時の信子の気持ちについて百字以内で説明しなさい。

〔下書き用〕



問五　この文章の表現と内容に関する説明として最も適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　5行目から6行目にある「――すべてがどの家も変りはなかった。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた」という表現は、初めて訪れようとしている照子の住居の周辺について信子に感じられた印象を述べたものであるが、これは学生時代の輝きを失って所帯じみてしまった俊吉に対して信子が感じることになる失望の伏線になっている。

イ　17行目から18行目の「それが信子には一層従兄と、話しているという感じを強くさせた」の「強くさせた」という第三者的な表現には、俊吉とは二年ぶりに言葉を交わすのに瞬く間に打ち解け合ってしまったことについて、夫を持つ身として後ろめたさを感じながらも俊吉に心惹かれているもう一人の自分に気づいた信子の戸惑いが示されている。

ウ　37行目の「私も小説を書き出そうかしら」という信子の言葉には、彼女が俊吉、照子と食卓をともにし、相変わらず何の屈託もなく快活な俊吉の語りを聞いているうちに、自身も女学生に戻ったような心持ちになって、自分が選ぶことができたかもしれない生き方について思いを巡らせていることがほのめかされており、この後の展開につながっている。

エ　49行目から50行目にある「『玉子を人に取られた鶏が。』――信子は草の中に佇んだまま、そう考えずにはいられなかった。……」という表現からは、本当は自分と結婚するはずだった俊吉を妹の照子に奪われてしまった自分と鶏を重ね合わせて、自嘲の思いにとらわれている信子の心情が読み取れ、照子に対する恨みの深さが「……」によって強調されている。

オ　58行目にある「彼女はふと気がつくと、何時も好い加減な返事ばかりしている彼女自身が其処にあった」という表現には、俊吉と照子の仲の良さを見せつけられた信子が、それと照らし合わせるように冷淡な夫との結婚生活を思い出して強い不安を抱き、夫とは別れて新しい生活に踏み出すべきか悩む余りに照子の話も耳に入ってこない様子が客観的に示されている。

カ　74行目の「残酷な喜び」という屈折した表現には、新妻らしい幸せをにじませる照子の口にした言葉の中に現れていた同情に反発を感じて何も答えなかった信子が、やがて泣き出してしまった照子を見て感じている、幸せな照子をおとしめ、姉に対して後ろめたい気持ちにさせたことに対する後ろ暗い快感が表されている。